

すみだ郷土文化資料館だより

MIYAKODORI

みやこどり

みやこどり(ゆりかもめ)は、すみだを舞台にした和歌に登場するなど墨田区にゆかりのある鳥です。

すみだ郷土文化資料館
SUMIDA HERITAGE MUSEUM



第68号 2024年(令和6年)3月発行

ふるさととの出会い、ときめきへの旅。

すみだ郷土文化資料館

131-0033 東京都墨田区向島二丁目3番5号

☎(03)5619-7034 ☎(03)3625-3431

電話番号は正確に。

https://www.city.sumida.lg.jp/sisetu_info/siryoku/kyoudobunka/index.html

E-mail sumida-hm@city.sumida.lg.jp

■開館時間

午前9:00～午後5:00(入館は午後4:30まで)

■休館日

毎週月曜日(祝日に当たるときは翌平日)

毎月第4火曜日(祝日に当たるときは翌平日)

12月29日～1月2日

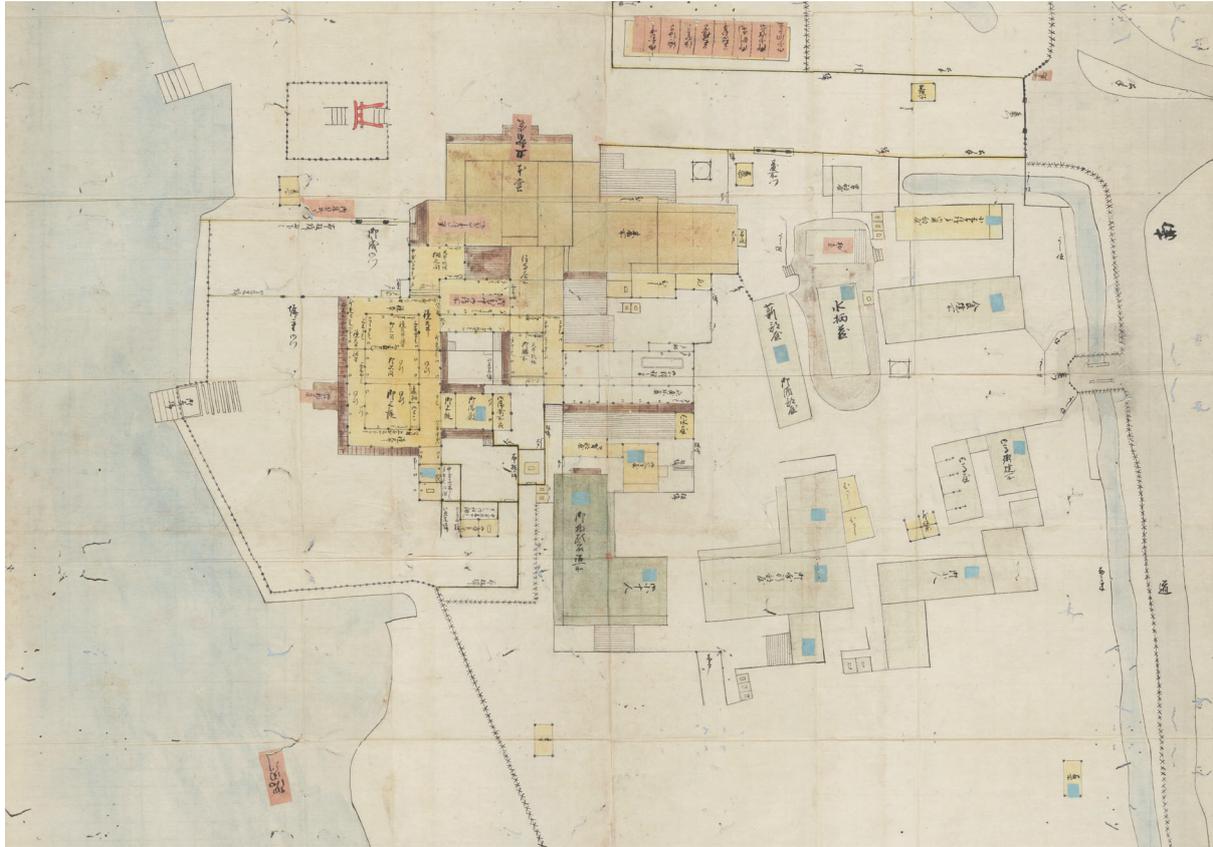
■観覧料

個人100円、団体(20人以上)80円、

中学生以下、身体障害者手帳・愛の手帳・

療育手帳・精神障害者保健福祉手帳を

お持ちの方及び介助の方は無料



隅田川御殿御指図(部分、すみだ郷土文化資料館所蔵)

企画展

大熊喜邦旧蔵 隅田川御殿三図と隅田堤の植桜

会期：令和6年3月16日(土)～5月19日(日)

大熊喜邦(1877～1952)は、帝国大学工科大学建築学科を卒業し、近代建築・日本建築研究で活躍した著名な学者です。氏の収集資料に、「隅田川御殿之図」があり、昭和4年(1929)刊行の『東京市史稿 遊園篇』第1巻に記載されています。現在、東京都公文書館が所蔵する「隅田川御殿之図」は、一昨年当館が大熊家のご子孫から寄贈を受けた同名

図の精巧な写しでした。もとは、江戸時代後期に隅田堤の植桜に尽力した隅田村名主坂田氏が所蔵しており、これを喜邦は入手したのです。また、「隅田川御殿之図」の御殿部分の描写は、貞享2年(1685)に五代將軍綱吉の御成を想定した際の指図(設計図)を模写したもので、「隅田川御殿御指図」と称されています。

さらに同寄贈資料には、榎本武揚

篆額・濱村大漕撰文「墨堤植桜之碑」(向島五丁目1番地)の碑文考察過程がわかる書状が遺されていました。これにより、かなり正確に隅田堤の植桜の過程が明らかにできそうです。

今回の企画展では、これらの新出史料を中心に据えながら、館蔵の浮世絵と一緒に川、舟、堤と桜が織りなす春の隅田堤の情景を紹介していきます。

表1 大熊喜邦旧蔵史料一覧

no.	資料名称
1	隅田川御殿之図(原図) 江戸時代後期～明治時代前期作成
2	隅田川御殿御指図 貞享2年(1685)作成
3	文書袋 明暦3酉年5月御建立より明和年中迄 隅田川御殿之図入 坂田
4	隅田川桜原図
5	向島隅田村寺島村須崎村小梅村大堤通桜植付原木(隅田村名主坂田氏書上)
6	(明治19年(1886))1月17日付濱村大瀬書簡(山下先生宛、山下下札付)
7	「隅田川御殿之図」書付
8	文書名メモ書き付箋

●大熊喜邦旧蔵史料の内容

大熊喜邦旧蔵史料は8点からなります。「隅田川御殿御指図」「隅田川御殿之図(原図)」と、その下図や墨堤植桜之碑を撰文した濱村大瀬の書状、『東京市史稿 遊園篇』に掲載された「隅田村名主坂田氏書上」が含まれています。当館には平成25年に寄託され、令和4年に寄贈となりました。

●隅田川御殿御指図とはなにか

江戸時代の鷹狩りは、二代将軍秀忠までは軍事的意味合いが濃いもので、江戸城以外の御殿で宿泊をしていましたが、三代将軍家光は江戸城からの日帰りの鷹狩りのみでした。四代将軍家綱も同様で、行き先に隅田川近辺を選ぶことが多く、木母寺にしばしば立ち寄りしました。

五代将軍綱吉が将軍になった直後の貞享2年(1685)5月隅田川御殿の

営作が若年寄秋元喬朝に命じられ、8月に完成しています(『徳川実紀』)。隅田川御殿御指図を見ると、上部に待機している「御老中」の次に「備後守」「伊賀守」「若狭守」表記が見られます。新設された側用人牧野成貞、喜多見重政、松平資直の3人で、補職時期が重なるのは貞享2年7月～元禄2年(1689)2月であり、これにより隅田川御殿御指図が、『徳川実紀』記載の綱吉の御成を想定した設計図であったことがわかります。

指図は大きく3つの部分に分かれています。黄色地に茶を塗った「本堂」を中心とする木母寺の寺院空間、黄色で塗られた御成空間と薄緑で塗られた話人空間です。黄色で塗られた場所(一部、寺院空間も含まれる)は、貞享2年に新たに普請する(された)場所を表しています。ですから、隅田川御殿は、木母寺に併

設された御殿であり、より正確には「木母寺御殿」もしくは「木母寺隅田川御殿」といった名称が適切ですが、ここでは旧来からの呼び方に従っておきます。

将軍の御成ルートは2つ準備されていました。舟で隅田川から訪れ、御上り場から陸に上がり、御籠台から御上段に至るルートと、大堤から表門、御成御門を通過、堀重御門を経て、御籠台から御上段に至るルートです。なお、鷹狩りを行わなかった綱吉は、木母寺を訪れることはありませんでした。

●隅田川御殿之図(謄写図)

東京市史の編纂事業は、明治35年(1902)に開始されました。詳しい経緯は不明ですが、大熊喜邦収集の隅田川御殿之図と隅田村名主坂田氏書上が採訪され、どちらも昭和4年(1929)刊の『東京市史稿 遊園篇』に掲載されています。隅田川御殿之図は当時まだ珍しかったカラー印刷による掲載でした。掲載されたのは、左下に「本図は家蔵に係る隅田村旧名主坂田家旧蔵本を以て之を写す 大熊喜邦」と記されている謄写図の方で、現在も東京都公文書館に所蔵されています。当館では開館10周年記念特別展『隅田川文化の誕生』(平成20年)に続き、2度目の展示となります。原図と揃って展示さ



図1 隅田川御殿之図 原図(すみだ郷土文化資料館所蔵)

れるのは、今回が初めてです。

●隅田村名主坂田氏書上

「隅田村名主坂田氏書上」は、隅田堤（江戸時代は、墨堤よりも大堤もしくは隅田堤と呼ばれることのほうが多かった）上に桜が植えられていく経過が詳細に述べられており、植桜の経過を述べた史料として広く活用されてきました。原史料の所在は不明でしたが、今回の寄贈史料に含まれていました。

『東京市史稿 遊園篇』掲載史料には日付がなく、作成時期や目的が不明でしたが、原史料には「明治19年4月10日 坂田蒙鳥」と末尾に記してありました。掲載時に落とされたようです。時期や内容から、榎本武揚篆額の「墨堤植桜之碑」の撰文者濱村大澗からの問い合わせに答えて、子孫の坂田蒙鳥が提出した文書であることが明らかになりました。掲載史料と原史料を比べると、2点違いがありました。一つは表題（タイトル）です。掲載史料では「原本」となっていますが、史料作成者が原本と記すことは考えにくく違和感があります。原史料では「原木」と読めます。珍しい表現ですが、桜樹の由来、という意味が込められていると解せます。また、「施肥」とされているところは、原史料では「寒肥」となっています。開

花前の冬の施肥は明治時代にも行われていましたが、遊園篇刊行時にはその点には思いが至らなかったようです。今回の発見のおかげで、より正確な理解が可能になりました。

●大澗から山下重民への諮問

寄贈史料には（明治19年）1月17日付「山下先生」宛の書簡があります。これは、隅田村名主坂田氏書上を入手した大澗が、他の疑問点も含めてのちに『風俗画報』編集者として明治期ジャーナリズム史に大きな足跡を残すことになる山下重民に諮問を行ったものです。山下は、下札の形で答えを寄せています。

山下は、自ら江戸時代の村役人の家を訪ねるなどして、調査を行っています。興味深いのは、旧記という古い言い伝えを書いた史料に対しての態度が現在の歴史研究者と異なる点です。例えば旧記に100年前の記述があった場合、現在では100年前の同時代史料によって検証を行う手続きが必要ですが、山下は旧記に書いていることは、そのまま「正しい」と考えていたようです。明治時代後半になると、江戸時代を懐古して多くの出版物が出されますが、そこに書かれていることの内容をどう考えるか、手掛かりになる史料でもあるのです。

●再考 家綱・吉宗の植桜

今回の隅田村名主坂田氏書上の原史料と大澗書簡の発見は、「隅田堤植桜史」に何を投げかけるのでしょうか。

まず、四代将軍家綱が茨城県桜川から種を取り寄せ植桜したという、墨堤植桜之碑の説は、隅田村名主坂田氏書上や江戸時代の史料にはまったく存在せず、突然この建碑の際に出てくることが、より明確になりました。家綱は慶安4年～寛文8年（1651～80）まで将軍職に在りました。桜川説は、200年後の建碑までまったく痕跡がないのに、突然顕れた訳ですから、今後同時代の一次史料などが出てこない限り、採用するのは難しいでしょう（現地の桜川でも、宝暦年間の史料が桜に関するもっとも古い資料となっています）。

一方、八代将軍吉宗の植桜に関しては、吉宗の側近くに仕えた松下伊賀守當恒についての『御場御用一件』の記事が改めて注目されます。こちらは、五代将軍綱吉以来途絶えていた鷹狩り復活の事蹟について日次形式で詳細に記した史料で、今回明治19年成立と判明した「隅田村名主坂田氏書上」よりも信頼性が高いものです。植桜については、次のように書かれています。「享保10巳年8月19日松下専助御前裁場遠的見分



図2 隅田川御殿之図（東京都公文書館所蔵）

之節、寺島御上り場より土手迄桃柳植、土手より木母寺前白鳥池^{あひり}辺迄同様^{そうどう}植候積り、同9月19日隅田川土手へ桃植候義、伊奈半左衛門家来申付、請負人植木屋権七郎植申候、同24日御庭より桜躑躅御前栽場木母寺へ植候に付植木奉行申合」とあります。寺島村の将軍用の舟付き場から土手、土手から木母寺前までは桃と柳を植える予定で、9月19日に桃を植え、同月24日には江戸城吹上御庭の桜と躑躅を御前栽場(将軍用の菜園)と木母寺に植えることを植木奉行と申し合わせた、との内容になります。

また、吉宗の植桜については、飛鳥山(東京都北区)のほうに力を入れていたことが知られています。歴代将軍の正史『徳川実紀』のうちでも、吉宗には数多くの挿話が「附録」

として残されています。(江戸幕府日記を元にして書かれた実紀部分よりも取り扱いは慎重になる必要がありますが、)飛鳥山とならんで隅田川での植桜についても記されており、注目されます。そこには、鷹狩り史料と同じように、吉宗の意向を汲んで植木の差配をおこなう近習として松下伊賀守當恒(専助)の名が見えます。また、「隅田村名主坂田氏書上」にも、松下伊賀守指図との内容が見られますので、隅田堤の植桜が、吉宗の意向に叶った内容であったことがわかります。

実は『東京市史稿 遊園篇』には、「隅田村名主坂田氏書上」(享保2年に木母寺前から渡船場や大堤左右に桜100本植付、享保11年同所へ桃柳桜150本植増)と『御場御用一件』における植桜時期や内容が異なること

を指摘して、後考を俟つとしていますが、ほぼ同時代の史料である『御場御用一件』を採用すべきでしょう。

●南に延びる植桜

享保10年の植桜以降、18世紀には木母寺や三囲神社で数本の桜が咲いていたことが分かってきました。19世紀になると、向島百花園創設者佐原鞠陽や隅田村名主坂田三七郎^{さんしちろう}など地域の人びとの努力によって植桜は南に延び、明治13年には枕橋まで到達しました(表2)。

○参考文献…福澤徹三「隅田川花見紀行巻」と江戸堂上派歌人笠原孟認^{もうい}、同「墨堤植桜の碑」の撰文過程(『すみだ郷土文化資料館研究紀要』9、令和5年(2023))。

(資料館学芸員 福澤 徹三)

表2 「隅田堤の桜」関連年表

時 期	西 暦	内 容
江戸時代初期	1600前後	隅田堤(大堤)が造られる
貞享2年	1685	五代将軍綱吉の御成り準備で隅田川御殿が整備される。「隅田川御殿御指図」が作成される
享保10年	1725	江戸城吹上御庭の桜・つつじが移され、御前栽場と木母寺に植えられる(「御場御用一件」、国立公文書館所蔵)
元文5年	1740	「春のみふね」で木母寺の桜1、2本がほころんでいた、と歌われる
安永3年	1774	大川橋(吾妻橋)が架けられる
寛政8年	1796	江戸町奉行所与力で堂上派歌人の笠原孟認が三囲神社と木母寺で桜を歌う
寛政11年	1799	三囲神社の出開帳の浮世絵で大堤の船着き場に桜が数本描かれる(「三囲の土手」)
文化年中	1804~17	向島百花園創設者佐原鞠陽らが白鬚神社(寺島村)の南北に植える
文政3年	1820	「亀田鵬齋漢詩」碑が木母寺(隅田村)に建てられる
天保2年	1831	隅田村名主坂田氏が寺島・須崎・小梅の3か村に株を分け、植えられる
天保7年	1836	白鬚神社に「隅田川観楓詩」碑が建てられる
弘化3年頃	1846	長命寺(須崎村)辺りに植えられる
嘉永7年(安政元年)	1854	隅田村名主坂田氏が株を(3か村に)分けて植えられる。三囲神社(小梅村)に到達する
明治7年	1874	小梅村の其角堂永機が村人と力を合わせ村境に植える
明治13年	1880	旧水戸藩知事徳川氏が邸前(小梅村)に植える。枕橋に達する
明治19年	1886	「名主坂田氏書上」が作成される
明治20年	1887	墨堤植桜之碑が建立される
昭和4年	1929	『東京市史稿 遊園篇』が刊行され、「隅田川御殿之図(謄写図)」と「隅田村名主坂田氏書上」が掲載される

出典：文化年中以降は、『墨田区文化財報告書』IX、13頁。同X、19,64頁。